GA文庫ラブコメフェアSS集（ショートストーリー）

ちょろいんとは、恋することと知りにけり

放課後、たまたま帰り道が一緒になった後輩の逢妻香乃が、唐突にこんなことを聞いてきた。

「征斗先輩。ちょろいんって、なんですか？」

「……なんだ、藪から棒に」

あまりに突然の質問だったので、スマートフォンを弄っていた征斗は思わず顔を上げてしまう。

香乃は細い人差し指を顎下に当てたまま、思い起こすように視線を青空に持ち上げた。

「この前、言われたんです。香乃はちょろいんだ、って」

「言われたって、誰に？」

「クラスの子たちにです。でも、ちょろいんっていう言葉の、意味がわからなくって」

英語じゃないですよね、などと、とんちんかんなことを聞いてくる。

征斗は少しだけ考えてから、その単語の意味をこう表現してみせた。

「ちょろいんっていうのは、ちょろい、と、ヒロインを組み合わせた造語だ。主に、香乃みたいな、特に大した理由もなく相手を好きになる子のことを言うらしい」

「なるほど、そういう意味だったんですか」

ふんふん、と頷いた香乃だったが、小さく首を傾げて、こんなことを言ってくる。

「でも、私は、ちょろいんじゃありませんよ？」

「……どう考えても、お前はちょろいんだろうが」

香乃はある日、突然征斗に告白してきた。

出会ってまだ、五分くらいしか一緒の時間を過ごしていない間柄にも拘らず、だ。

これをちょろいんと言わず、なんと言うのだろうか。

しかし、香乃は納得いかない、とばかりに唇を尖らせると、

「だってだって、私、理由もなく征斗先輩のこと好きになったわけじゃありませんから」

「そうだったか？」

「そうですよっ」

全くもう、と抗議するように頬を膨らませて、香乃はこう続けてくる。

「きっかけは、征斗先輩が助けてくれたことですけど。でも、それだけじゃなくて、いつもいっぱいいっぱい、私のことを気にかけてくれて」

「……」

真っ直ぐの言葉に、聞いている征斗の方が照れてしまう。

視線を逃がす征斗を見上げ、くすりと香乃は笑みをこぼした。

「ちょっとだけ意地悪なこともありますけど、優しくて、頼りになって、最後には絶対絶対、私のことを助けてくれる、正義のヒーローなんですから」

香乃は基本的に、征斗を完璧超人かなにかだと勘違いしている。

抗議の声を返そうとするも、香乃は本当に嬉しそうな笑みを浮かべながら、告げてきた。

「そんな人を好きにならないなんて、あり得ないと思いませんか、先輩？」

なにも言葉を返せないでいる征斗に、香乃はすっと征斗の前に回り込んでくると、

「ですから――」

後ろに手を組んだ状態で上目遣いを向けてくると、とびきりの笑顔でこう言ってきた。

「――ずっと私を、先輩だけのちょろいんで、いさせてくださいね？」

走馬灯に出てくるかもっ

「もぉ、二人きりのときは、先生じゃなくて春香さんでしょぉー!?」
柊木ちゃんが怒ることはほとんどないけど、これに関しては毎回怒る。
まあ、それが可愛くてわざとやっているんだけど。
「春香さん」
「はぁーい。何ー？」
そうやって訊かれると、ちょっと困るんだよな。
別に何か用事があったわけじゃないし。
そもそも、可愛いからわざと怒らせるっていうのが俺の目的だ。
「ううん。何でもないよ」
「あー？　もしかして『呼んでみただけ』っていう仲良しカップルあるある？」
「いや、そういうわけじゃないんだけど――」
「誠治くぅんー？」
……声が甘ったるいので、そのカップルあるあるをやりたいだけだ。

何？　って訊いたら、どうせ――
『何でもない。呼んでみただけだよ？　うふふ』
ってなる。
たぶん、そのまま甘えん坊コースまっしぐらだ。
ちょっとひねくれたところがあるせいか、俺は展開が読めると意地でもそうしたくなくなる。
「あ、そういえば、この前パスタ食べたいって言ってたでしょ。いい感じの店探したよ」
「え――ああ、うん……」
ちょっと不満そう。『今その話はしなくてもいいでしょ』って顔に書いてある。
わかりやすー。
ゴロゴロと猫みたいに甘えるきっかけを失くしたせいで、柊木ちゃんがモジモジしている。
性格は犬っぽいけど、行動は常にデレモードの猫みたいだ。
携帯で見つけたその店の情報や写真を見せても、上の空。
俺が甘えないし、甘やかしてもくれないから、徐々に不機嫌になってきた柊木ちゃん。
禁断症状みたいにぷるぷる震えると、がばっと俺に抱きついてきて、ソファに押し倒された。
「うわあ」
「んもうっ！　誠治君のいけずっ」
俺の体に自分の体を重ねるようにぴったりと密着。

心地いい重さとふにふにとした胸の柔らかさに、理性が吹っ飛びそうになる。
すう、はあ、と柊木ちゃんは何度か深呼吸した。森林浴かな？
「……ぎゅっと抱きしめてください……」
顔をこっちにむけた柊木ちゃんはちょっと怒っていた。
言われた通りに抱きしめると、するする、と顔を近づけてきた柊木ちゃんが、ちゅっとキスをした。
「うふふ」
ずいぶんご満悦の様子だった。心臓の音を聞くように、俺の胸の上で静かになった。
「あのー？　先生……？」
呼んでも反応がない……。顔を覗くと……完全に寝てる。
俺の体に、覆いかぶさったままで。
ちょっと重いし、ふにふにだし、困ったなと思っていると、いつの間にか俺も寝ていた。
起きたときは、すでに柊木ちゃんが起きたあとだった。
「イチャイチャしながら二人とも昼寝って、なんか、素敵っ。走馬灯に出てくるかもっ」
「いや、そんな大げさな」
「ハッピーだったなぁ。あのまま目覚めなくてもオッケー、みたいな？」
「なんか怖ぇこと言い出した！」

「うふふ。冗談、冗談」
歌うように言う柊木ちゃんは、そのあとずいぶんとご機嫌だった。

27歳ですがなにか？　2

「『GA文庫ラブコメフェア』ですよ、織原さん！」
「……そう、だね」
「全国の専門店で対象のラブコメ作品を二冊購入すると、俺達の作品――『ちょっぴり年上でも彼女にしてくれますか？』を含めた『4タイトルのSSが読めるイラストカード』がもらえるそうです。これは買うしかないですね！」
「……うん、そうだね」
「あの、織原さん……？　始まりのテンションが第一弾のSSと同じなんですけど……てかこまでほぼコピペなんですけど。頼みますよ。せっかく第一弾が好評だったから、こうして第二弾ができたっていうのに」
「……ふふ。まったく、さすがはGA文庫だよね。ここ数年ずっと『今、勢いがあるレーベル』と評されるだけのことはある。評判よければすかさず第二弾をやる感じ、如才ないわー」
「なんですか、その、褒めてるようで嫌みっぽい感じ」
「……嫌みも言いたくなるよ。桃田くん、きみにわかる？　十代のキャピキャピしたヒロイン達と一緒に並べられる、アラサー女の苦悩が……」

「……」
「横並びだけは、横並びだけは本当にキツいの……。差を見せつけられる感じがするの……普通に制服着たJK達に、同じように制服着たアラサーが混ざってるんだよ……？　『27歳ですがなにか？』みたいな顔で、堂々と制服着ちゃってるんだよ……ていうか、なんで私、2巻の表紙でも制服着てるの？　2巻じゃ一回も制服着てないんだけど……？」
「それは、その……商業的な理由がいろいろとあるんですよ、たぶん」
「まあ……今更なんだけどね。そもそも書店に並んでる時点で、いろいろ恥ずかしいっていうか。表紙を飾る十代ヒロイン達の横で、何食わぬ顔で制服着て表紙飾ってる27歳の女が……私だから」
「で、でも織原さん。ラノベって、現代モノだけじゃないですよ。剣と魔法のファンタジーだって多いですし、吸血鬼やエルフがメインヒロインやってる作品だって多数います。年齢が300歳とか600歳とか女の子もたくさんいますから、そういう人外ヒロインと比べれば、織原さんはむしろ若い方なんじゃ――」
「人外!?　人外って……桃田くん、それ、ちょっとひどくない？　私って人外の方に入れられちゃうの？　アラサー女はもはや人外だと、そう言いたいの？　そんな、女性の権利団体に喧嘩売るような発言をするなんて」
「いやいやいやいや！　ちょっと被害妄想すごすぎでしょ、織原さん！　俺はただ、人外ヒロ

インが大量にいるファンタジー全盛の最近のラノベ界で言えば、織原さんはむしろ若い方じゃないかと言ってるだけで……」

「……気持ちは嬉しいけど、でも桃田くん。たとえば私に『桃田くんは格好いいよ、ゴブリンに比べれば』って言われたら、嬉しい？」

「……嬉しくないですね」

「つまり、そういうことだよ」

「……なんかすみません」

「……うん、私こそ、なんかごめん」

「つよいよ、真織さん」

29とJK

俺と夏川真織は、十三も年齢が離れている。
昭和生まれと平成生まれ、話が合わないのが当たり前である。
「はあ？　好きな漫画？　なんでいきなり？」
立川駅近く、有名コーヒーチェーンの店内で、向かいに座る彼女は怪訝な顔をした。
「いや……何か共通の話題でもないかと思ってな」
「漫画はほとんど読まない。小説も読まない。花恋には悪いけど、絵空事には興味がないんだ」
一番「らしい」答えが返ってきた。うーん。こいつとの会話、難易度S。
「子供のときも読まなかったのか？」
「伝記漫画みたいなのは読んだかな。ナイチンゲールやキュリー夫人、ヘレン・ケラー」
「女性ばかりだな」
「私、女だから。女の伝記の方が面白いし共感できるじゃないか」
さらっと真織は言ってのけて、カップに口をつける。かっこいい。これで飲んでいるのがホイップ山盛りチョコソースましましの激甘マロンラテじゃなければなぁ……。
「前から聞いてみたかったんだが、男嫌いなのか？」

別に、と真織は答えた。
「ただ、だらしない人が多いって感じることはあるかな」
「たとえば？」
「お酒飲んだサラリーマン。塾の帰りに見かけるたびに思うよ。なんであんな道端で醜態をさらすの？　大の男が、真っ赤な顔で大声で叫んだりふらふらしたりさ。恥ずかしいよ」
「……うーん」
これまた、真織らしい発言だった。しかも正論である。
しかし俺もサラリーマンのはしくれ、ひとこと弁護したくなる。
「飲まなきゃやってらないこともあるんだ、大人は」
「そんなの高校生だって同じだよ。辛いことはたくさんある。だけど大人はお酒が飲めて、高校生は飲めない。こっちの方が辛いじゃないか」
「……」
あっ、なんか俺、論破された。このままじゃ大人の沽券にかかわる。反論しないと……。
「JKは酒は飲めないけど、激甘マロンラテは飲めるじゃないか」
「……甘くないし」
ギヌロッ、と真織さんに睨まれました。
うーん、このJKつよい。つよい、JK。